

■十訓抄 大江山

▼四四頁▲

発問 和泉式部とはどのような人か。知っているエピソードを答えよ。 **知**

答 歌人。作は百人一首にも入る。中宮彰子の女房。『和泉式部日記』の作者。情熱的な恋をした人としても知られている。

発問 「参りたりや」(四四・3)とあるが、どこへ参るのか。 **思**

答 小式部内侍の元へ。

発問 「いかに心もとなく思すらむ」(四四・3)の「思す」は誰の動作か。 **思**

答 小式部内侍。

発問 「いかに心もとなく思すらむ」(四四・3)の「らむ」を文法的に説明せよ。 **知**

答 現在推量の助動詞「らむ」の連体形。疑問の副詞「いかに」と呼応して連体形となっている。

発問 「御簾よりなからばかり出で」(四四・4)たのは誰か。 **思**

答 小式部内侍。

発問 「袖をひかへ」(四四・5)るとは、誰が何をどのようにしたのか。 **思**

答 小式部内侍が定頼中納言の直衣の袖を軽く捉えて、そのまま行き過ぎようとしたのを留まらせた。

発問 「大江山……」(四四・6)の和歌を掛詞に注意して、現代語訳せよ。 **思**

答 大江山から生野を通って行く道が遠いので、また天の橋立の地を踏んでみたことはありませんし、母からの手紙も見えていません。

発問 「詠みかけけり」(四四・7)とあるが、当時和歌を詠みかけられた者はどうしなければならな

かったか。 **知**

答 返歌をするのが礼儀であった。

発問 「思はずに、あさましくて」(四四・7)の動作主は誰か。 **思**

答 定頼中納言。

補充 「思はずに」(四四・7)とあるが、何を「思いがけなく」思ったのか。三十字程度で答えよ。 **思**

答 小式部内侍が技巧を凝らした和歌を即興で詠みかけてきたこと。(29字)

脚問 「かかる」(四四・7)は、どのようなことを指しているか。 **思**

答 定頼が投げかけた言葉に対して、局の前を通過するまでのほんの短い時間に、小式部内侍が優れた和歌を作って詠みかけてきたこと。

発問 「かかるやうやはある」(四四・7)を品詞分解せよ。 **知**

答 かかる―連体／やう―名詞／やは―係助(反語)／ある―ラ変・体

発問 「かかるやうやはある」(四四・7)を現代語訳せよ。 **思**

答 このようなことがあるのか、いや、あるはずがない。

補充 「これより」(四四・9)の「これ」の説明として最も適当なものを、次から選べ。 **思**

ア 歌会に出す和歌を母に頼っていた小式部内侍を、定頼中納言がたしなめたこと。

イ 和泉式部の和歌を定頼中納言が酷評したことに対して、小式部内侍が和歌で叱責したこと。

ウ 歌作に苦しんでいた小式部内侍に、定頼中納言が適切なアドバイスをしたこと。

エ 定頼中納言の意地悪な発言に対して、小式部内侍がすぐれた和歌で対処したこと。

オ 歌にかこつけて言い寄ってきた定頼中納言を、

小式部内侍が和歌で見事にやり込めたこと。

答 エ

補充 「歌詠みの世におぼえ出で来にけり」(四四・

9)の現代語訳として最も適当なものを、次から選べ。**思**

ア 世間の歌の名人として天皇から褒められたということだ。

イ 歌詠みの世界で名声が高まったということだ。
ウ 和歌集の撰者の一人に選ばれることになったということだ。

エ 歌人としての身分を公式に許可されたということだ。

オ 歌人の世界で生きていく自覚が芽生えたということだ。

答 イ

発問 「おぼえ出で来」(四四・9)とは、どういう意味か。**知**

答 名声が高まる。有名になる。

▼四五頁▲

発問 「うちまかせての理運」(四五・1)とあるが、これは誰の判断か。**思**

答 編者。

発問 「これはうちまかせての理運」(四五・1)と

あるが、「これ」の指す内容は何か。**思**

答 定頼のからかいに対して小式部内侍がとつさに優れた歌を作つて詠みかけたこと。

発問 「これはうちまかせての理運」(四五・1)と

あるが、編者が小式部内侍の行動をこのように評したのはなぜか。**思**

答 小式部内侍が和泉式部の娘であり、また、後代の者である語り手からすれば、このエピソードの後の小式部内侍の活躍を十分に知っているから。

▼思考力問題▲

補充 以下の文章は、藤原定頼の別の逸話である。

「大江山」と本文を読んだ後の発言の中から、解釈として最も適当なものを選べ。**思**

水もなく見えわたるかな大堰川^{おほみ}きしの紅葉は雨とふれども

この歌は、中納言定頼が歌なり。*一条院の御時、大堰川の行幸に、歌詠ませられける時、*四条大納言、「わが歌はいかでありなん。中納言よくよめかし。」と思はれけるが、すでにこの歌を、「水もなく見えわたるかな大堰川」と詠みあげたりけるに、「はや不覚してけり。」と顔の色を違へて思はれたるに、「きしの紅葉は雨とふれども」と詠みあげたりけるに、「秀歌仕りて候ひけり。」と言ひて、顔の色出で来てぞ思はれける。『西行上人談抄』

【語注】

*一条院：一条天皇。

*四条大納言：藤原公任。定頼の父。

ア 「大江山」では小式部内侍が母に歌の代作を頼んだんじゃないかと邪推しているけど、この文章では自分が父に代作してもらっているね。自分に自信がない人ほど他人を疑うんだよね。

イ 「大江山」では小式部内侍に歌を詠みかけられて狼狽しているし、この文章では下手な歌を詠んでしまったと思つて顔色を変えているね。動揺が態度や表情に出やすい人なんだろうな。

ウ 「大江山」では小式部内侍を侮った人物として批判されているけど、この文章では周囲を驚かせる名歌を詠んだ人物として描かれているね。歌人としての力量は確かなんじゃないかな。

エ 「大江山」では小式部内侍の歌に返歌もできず退散したけど、後日天皇の前ではその経験を生かして、地名と掛詞を織り込んだ秀歌を詠み出したね。案外素直な性格の人なのかもしれないな。

オ 「大江山」では小式部内侍を軽く見た結果、歌人としての名声を失うことになったけど、天皇の前で優れた和歌を詠んで見事に汚名返上したね。歌に関しては負けず嫌いなことがわかるな。

答 ウ

▼てびき▲

学習

1 「丹後へ遣はしける人は参りたりや」とは、どのようなことを言おうとしたのか。説明してみよう。

思

母親・和泉式部に歌合で詠む歌について、指導を仰いだろう、(そのために遣わした使者は帰ってきたか)ということ。代作を頼んだろう、ということまで言っている可能性もある。

2 「大江山……」の歌で、小式部内侍が伝えようとしたことを説明してみよう。

思

母親・和泉式部に使者を送り、和歌の指導を仰いだろう、というニュアンスの定頼の言葉に対して、「ふみも見ず」、つまり「母の手紙など見ておりません」と宣言し、かつ自身が定頼中納言の前でそのような質の高い和歌をすぐに作ってみせることで、和泉式部の応援がなくともそれだけのことが出来る力量があることをはっきりと伝えようとしたと考えられる。

3 「返歌にも及ばず、袖を引き放ちて、逃げられけり」とは、誰がなぜそのようにしたのか。説明してみよう。

思

定頼中納言が、小式部内侍の予想外の行動に驚き、それに対して適切な対応ができなかったため、とにかくその場を退散した。

言語活動

1 『十訓抄』は教訓を示すための説話を集めた作品である。この「大江山」はどのような教訓を示すために収録されていると考えられるか。話し合ってみよう。

知思主

他人の力量をあなどってはいけない、ということ。

ことばと表現

1 「大江山……」の歌に使われている表現技法を説

明してみよう。知

答 掛詞：「いくの」に地名の「生野」と「行く野」が掛けられている。また、「ふみ」に「踏み」と「文」が掛けられている。

倒置：「まだふみも見ず」と「天の橋立」。

歌枕：「大江山」「生野」「天の橋立」。

句切れ：四句切れ。

2 「知られざりけるにや」を文法的に説明し、この後に省略されている言葉を補って現代語訳してみよう。

思

答 知ら—ラ四・未／れ—尊・未／ざり—打・用／ける—過・体／に—断・用／や—係助(疑問)(省略語)「にや」の後に「あらむ」が省略されている。

(現代語訳)お気づきにならなかったのでしょうか。